

『相撲用語あれこれ』

三月号では相撲の極まり手についてご紹介しましたが、今回は相撲用語についてお話しします。よく大相撲の実況中継でも日頃の私たちの生活ではなじみの無い用語がでてきますが、今回はそういった相撲用語をご紹介します。

また、こういった用語を知っておくと相撲をより楽しく観戦できると思います。

○あうんのこきゅう(阿吽の呼吸)
仕切りで、両者の吐く息と吸う息が合って心気が充実したとき立ち会うこと。

○あんこ

肥満型のこと。魚のアンコウからの連想。瘦身型は「そっぽ」。

○あんま(按摩)

実力が段違いに低い者が上位者のけいこ相手をする。上位者にとってはウォーミング・アップ、筋肉をはぐす「あんま」の役目になるということ。

○いなす(去なす)

相手が激しく出てくるところを、急に体をかわして相手の力をそらすこと。

○かいなをかえす(腕を返す)

差した手を内側、親指側にひねり、手の甲を相手の背につくようにして、ヒジを張ること。こうして差し手側の足を踏み込めば相手に上手まわしを取られたり、巻きかえられない。相手の体も浮かすことができるし、投げや叩きで負けない体勢になる。「差し手を返

いう。野天相撲の際、水はけの便をよくするために作られた名詞。

○なまくらよつ(鈍ら四つ)

右四つ、左四つ、どちらでも相撲がとれることで、得意技が中途半端という見方をされることが多いが、相手の苦手な四つでとって……という利点もある。

○はき手

取り組み中に足が流れたり、相手の技をこらえきれなかった場合などに、手が軽く土俵の砂にふれること。

○まえぶくる(前袋)

まわしの股にはさんだ前側のところ、袋のようになっていて。取組み中これを引くことは禁じられている。

○やまげいこ

土俵のないところに円を書いて行う稽古のこと。巡業などでよく行う。

○あらきだつち(荒木田土)

埼玉県西部の荒木田原から出る土で粘着力があり(壁土に用いる)、土俵の盛土に適している。

○いきたい(生き体)

負け寸前と思われても、まだ逆転能力が残っている「体」。これは主に足を見て、爪先の裏が土俵に着いていれば生き体。この場合の足の状態を「生き足」ともいう。

逆は「死に体」「死に足」。

○かちあげ

立ち合いに片手を曲げ、ヒジで相手の胸かアゴを突きあげ、体当たりすること。

○かばいて(庇い手)

相手と重ね餅になって倒れる場合、相手の体が落ちるより先に、自分の手が先に土俵に着いても、相手の体が重心を失っていれば負けにならない。下の者の衝撃を少なくしてケガを防ぐためである。決まり手は浴びせ倒し、寄り倒しなどになる。

○きんじ手(禁手)

相撲競技中、用いることが禁じられている行為で、(財)日本相撲連盟「審判規定」第十九条では、次のとおり規定されている。張り手(とくに耳)、こぶし、または指で突くこと(目等の急所)、掴むこと(頭髮、咽喉、前ぶくろなど)、蹴ること(向う蹴り、胸部、腹部)、逆指、咬むこと。合掌、立てまわしをつかんだときは取り手をかえるように指示する。

○けししょうがみ(化粧紙)

選手(力士)の清拭用の紙のこと。で、力紙ともいう。力水、力紙、塩の三種を組みにして東西の向正面側の土俵下に用意する。

○けんかよつ(喧嘩四つ)

得意が左四つ、右四つと違う者が対戦する場合、激しい差し手争いになるところから「けんか四つ」という。左四つ(右四つ)同士ならば「相四つ」

○すなかぶり(砂かぶり)

土俵近くの溜席のことをいう。常連や相撲通が多く、時に土俵の砂をかぶることもある。

○たいをあずける(体を預ける)

出足を止めて、自分の体を相手の体に寄りかかるようにすること。寄り倒す際などの体勢である。

○たぐる(手繰る)

突っ張りなどで攻めてくる相手の腕をつかんで、自分のほうにくり寄せ、相手の体をくずすこと。

○たてみつ(立て樗)

まわしをつめた時、股を覆って後まわしまでの立帯の部分という。

○ちからみず(力水)

東西の向正面側にある水桶の水をいい、うがい用の水で「化粧水」ともいう。

○てよつ(手四つ)

互いに体を離して、両手をつかみ合い、攻めのタイミングを狙うこと。片手だけ合わせている場合は「片手四つ」。

○はず(筈)

親指と他の四本指で矢筈(Y型)の格好をし、相手の脇の下(親指を胸の方に出す)に当てること。これで押せば「はず押し」といい、当てる手によって「左はず」「右はず」「両はず」がある。

○ふみこし(踏み越し)

足の爪先が土俵外に出ること。カカトが出るのを「踏み切り」という。

○もうしあい(申し合い)

けいこ場で勝負を試みることで、主として実力の同等の者同士が行う。あるいは他の部屋が集まり、合同稽古することもある。